

佐土原キリスト教会・2021年6月27日・聖日礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書19章31～37節

説教題：血と水の恵み

苦しくてどうしようもない時があります。どうすれば良いのか。先日も、あるご高齢の牧師がインターネットの動画で熱心に語っておられた、という話をしました。「神様に助けを求めれば良いのです。神様は、助けようとしてあなたの傍にいて下さいます。あなたを助けて下さいます…私も神様を求めた時から、あらゆる問題が解決しました…」。実際、神様に助けを求めたら、すぐに、見事に問題が解決する、ということばかりではないと思うのですが、しかし、自分でもどうしようもない時、神様に期待し、助けを求めることが出来る、それは大きな恵みだし、希望だと思います。その恵みも、希望も、それは十字架に始まるのです。

さて、イエス様が十字架で息を引き取られたのは、金曜日の午後3時頃でした。もう2～3時間したら土曜日(安息日)が始まります。しかもそれは、1年の最大の祭りである「過ぎ越しの祭り」を祝う安息日でした。それでユダヤ人達は、十字架の遺体を取り降ろしてくれるように、総督ピラトに願い出ました。まだ死んでいない受刑者を十字架から取り降ろす場合は、囚人の足を木槌で砕きました。イエス様の両側にいた囚人は、まだ死んでいませんでしたので、兵士達は彼らの足を砕いてとどめを刺しました。しかしイエスはすでに死んでおられたので、彼らは足の骨を砕くことはしませんでした。しかし、その死を確かめるためでしょうか、1人の兵士が槍でイエス様の脇腹を突き刺しました。するとその傷のところから血と水が流れ出て来ました。

ここでヨハネは「私は見たんだ、本当なんだ」と力を込めて書いています。ヨハネがこれを書いた時、彼は信仰の故に困難に直面しているキリスト者を励ます必要に迫られていました。見たからといって、意味のないことを書くはずがありません。彼にとってこの出来事は、既にイエス様を信じている人々を励まし、まだ信じていない人々をキリストに導くために大切な意味のある出来事だったのです。ではヨハネは、この「血と水」の記事を通して何を伝えようとしたのでしょうか。

1：血の恵み～罪の赦しの恵み

まず「血」です。十字架の背景になっているのは「過ぎ越しの祭り」です。それは、この時から1300年前、エジプトで奴隷として苦しんでいたイスラエル人が、神様の力によってエジプトから救い出されたことを記念する祭りでした。彼らは、どのようにして救われたのか。イスラエル人を解放しようとしないうエジプトに対して、死の使いがエジプト中の初子(長子)を打ったのです。それによってエジプト人は、イスラエル人に「出て行け」と言って、彼らを解放したのです。死の使いがエジプトの初子を打つ中で、イスラエル人だけは「家の門柱と鴨居に子羊の血を塗る」という方法で守られました。家の門柱と鴨居に子羊の血が塗られていたら、死の使いはその血を見て、その家を過ぎ越したのです。エジプト人でも、子羊の血を塗った家は守られました。イスラエル人は、イスラエル人だからということで、あるいは善人だからとか、正直者だからとか、そういう理由で救われたのではないのです。人間のどんな功績も、神の裁きから私達を救うことは出来ません。彼らにも神の前に罪がありました。しかし、ただ神が「わたしはその血を見てあなたがたの所を通り越そう」(出エジプト12:13)と言われたように、彼らが救われるかどうかは、子羊の血に拠ったのです。

イエス様から流れ出た血を考える時、「過ぎ越し」に流された子羊の血のことが大きな意味を持ちます。聖書は言います。「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです」(1コリント5:7)。私達にとっては、イエスが子羊の血を流して下さったのです。どういうことでしょうか。

聖書には「人間には、一度死ぬことと死後に裁きを受けることが定まっている…」(ヘブル9:27)とあります。3年前に来て下さった森繁さんが「スピード違反」という歌を歌っています。「人が追

い越そうとしたら、わざとこっちもスピード出してやれ。抜かさせないようにしてやろう。自分の前には絶対入らせない」。私達の情けない現実を歌っていると思うのです。ある時、ある場所でバイブル・スタディーをしていました。「皆さんには罪ありませんか」、そう聞いたら、1人の方が言われました。「私の心を2つに切ったら、真っ黒だと思います」。信仰があっても、時に神に呟き続ける不信仰はないのでしょうか。いずれにしても私達は、自分の良さで神の裁きの時に合格点をもたらるような者ではないのです。だからこそ私達には、救いの道が必要なのです。その道とは、イスラエルの人々が羊の血によって救われたように、私達も神の本当の子羊であるイエス様の血によって救われる、という方法です。イエス様が私達にとっての「過ぎ越しの羊」だから、イエス様の足は折られなかったのです。聖書に「過ぎ越しの羊の骨を折ってはならない」(民数記 9:12)と書いてあります。「イエスが十字架で流された血は、私のためであった」と信じて、信仰によってイエス様の血を受け取り、心の門柱と鴨居にイエス様の血を塗ることによって、私達がどんなに弱く、どんなに神の御心に添わない者であっても、イエス様の血の故に私達は罪赦されて、「神の祝福の対象」にしてもらえるのです。

「祝福の対象となる」とはどういうことでしょうか。三浦綾子さんがこんなことを言っています。「私はよく、人様に『お祈りしてください』とお願いする…私は、しかし、決して気軽にお願いしているつもりはない。この言葉を口から出す時、私の心の中には、キュッと引きしまった厳粛な気持ちの流れがある。本気で言っているのだ。祈りを聞いてくださる神がいられる。だから祈りはきかれる。ゆえに、人々に祈っていただきたい…イエス様は『もし、あなたがたのうちのふたりがどんな願いごとについても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう』とマタイ伝 18 の 9 で約束して下さっている。私のような者でも約束は守ることが多い。ましてイエス様の約束である。きっと、心を合わせて祈るなら、きいてくださるにちがいない」(三浦綾子)。キリストの血の故に罪赦されている存在だからこそ、このような希望が生まれて来るのです。「神に赦されて存在している」、それが私達なのです。イエス様の血が、私達に罪の赦しをもたらしたのです。

2: 水の恵み～聖霊による命の恵み

ヨハネは、「水が出て来た」と書いています。かつてイエス様は、サマリヤの女に言われました。「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます」(ヨハネ 4:13)。また「仮庵の祭り」の時に言われました。「『わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。』」、これについては、「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである」(ヨハネ 7:38～39)と解説がついています。そのように、「ヨハネ福音書」において「水」というのは、神の霊、「聖霊」を表します。イエス様のわき腹から水が出た、ヨハネはそれを見て「信じる者は、イエスの『血』によって神の赦しを受け取るように、イエスの『水』によって神の聖霊を受け取るようになる」ということを言っているのです。聖霊を受けるとは、神の命を受けるということです。言葉を換えると、永遠の命を受けるということです。信仰者にとって、永遠の命の希望は、罪の赦しに伴う大きな恵みです。

イエス様は、その伝道活動において、死人を甦らせなさいました。でも、死から甦らされた人もまた死にました。結局死ぬのなら、なぜイエスはそのようなことをなさったのでしょうか。それは、それらのことを通して「キリスト教の救いとは何か」ということを示されたのです。「キリスト教の救い」とは、最終的には「からだのよみがえり」ということです。永遠の命とは、何か訳の分からない状態でワフワフ存在しているということではないのです。私達は、自分を苦しめて来た罪の重荷を取り除かれて、新しい身体を持った存在として、生きているのが嬉しくて仕方がない、神に

仕えるのが嬉しくて仕方がない、そういう状態に甦って、生かされて行くのです。それも主の十字架の故の大きな恵みです。

しかし聖霊の恵みは、天国の恵みだけではありません。今を生かす恵みです。先日も「田原米子さん」の話をしました。彼女は、高校生の時、お母さんが急に亡くなり、空しさに襲われ、生きる意味も希望も失くし、電車で飛び込むのです。両足と左手を切断。右手は指が3本だけ残されました。「この先、この体でどうやって生きて行けば良いのか」。入院中は、病院からもらう睡眠薬を溜め込んで、それを飲んで死ぬことばかりを考えていました。その彼女がキリストに出会い、心に「神の支配」が来るのです。「指が3本しかない！」と叫んでいた彼女が、「指が3本もあるじゃないか。神様が残してくれたのだ！」と感謝して生きるようになるのです。朝、義足をつけると祈られるのです。「神様、今日、誰に会わせて下さるでしょうか。あなたが私に出会わせて下さる方のために、私が生きて出来るように導いて下さい…今日もあなたの器として生きて行きます。私を用いて下さい」。そう祈って、1日1日を生き活きと生きられたのです。そして学校に招かれては「生きるって素晴らしい」と語って回られたのです。既に天の御国に帰られましたが、彼女の生きられたお姿を思う度に、聖霊が、永遠の命の恵み、天国の力で人を生かす、今を生かす、そのようなことを否定することが出来ない気がします。

イエス様の十字架は、そのように大きな恵みをも、私達にもたらしたのです。

3：御心にそった嘆き～恵みを頂くために

ヨハネは 37 節で「また聖書の別のところには、『彼らは自分たちが突き刺した方を見る。』と言われているからである」(37)と言っています。「彼らは自分たちが突き刺した方を見る」(37)とはどういうことでしょうか。

この言葉は「ゼカリヤ 12 章 10 節」の言葉です。「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く」(ゼカリヤ 12:10)。この「彼らは自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見…」(ゼカリヤ 12:10)という預言、これはまさにイエス様の十字架において成就する訳です。しかし、この「彼らは…わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き…」というのは誰のことでしょうか。イエス様を直接突き刺したのはローマ兵です。しかしこの「彼ら」というのは、恐らくエルサレムに生きる者、神の民ユダヤ人のことでしょうか。しかし広い意味では、弟子達のこととも言われているのではないのでしょうか。彼らは、イエス様と一緒に行動したのです。イエス様が犯罪人であるなら、彼らは共犯者です。でも彼らは、イエス様1人に責任を押しつけて逃げたのです。その意味で、間接的に彼らは、イエス様を槍で突き刺したのです。しかしその後で彼らは、自分達の間にもならない弱さ、卑怯さ、自分中心、それを嘆いたのです。しかしゼカリヤ書は、その嘆く彼らに「恵みと哀願の霊を注ぐ」(10)、神の霊が注がれる、と言っているのです。そして事実、十字架の 50 日後、彼らの上に神の霊が降り注ぎ、そして彼らは、自分達の全てのことに対する赦し、永遠の命の確信を握って立ち上がって行くのです。

何を教えられるのでしょうか。血の恵み、水の恵みを頂くための、神の霊を頂くための「嘆きの大切さ」ということです。ある牧師の話です。彼は牧師家庭に生まれ育ちましたが、極貧の経験を通して物的な豊かさに人生の目的を見出すようになりました。仕事でお金を沢山稼ぐようになりました。レコードを買いあさり、高価なオーディオ設備を整えて満足していました。そんな時、奥さんが交通事故を起こします。彼の大好きなレコードの最高潮の部分が流れている時に、事故を知らせる電話のベルがなるのです。電話を受けた時、それまで心血を注いで来たレコードも、自慢のオーディオも、一瞬にして色あせて見えたそうです。奥さんはある家に突っ込んでしまったのですが、

その家にはヤクザの息子がいて、それから毎日のように呼び出される生活が始まりました。どうにもならなくなった時、彼は20年ぶりに神に祈るのです。「神様、私の立っていた所は間違っていました、あなたを土台にして立たなければならなかったのです。神様、心から悔い改めます。どうぞこの状況から救い出して下さい」。不思議なことに、その時から呼び出しがなくなったのです。保険会社に問い合わせたら、同じ家に別の車が突っ込んで、その事故の保険金を請求するために、前の事故の示談を成立させなければならなくなって、例の息子が急いで示談に応じたということでした。彼は、その時、2つのことを悟るのです。1つは、神を土台として生きることの確かさです。もう1つは、後から突っ込んだ人が、いわば彼の身代わりになってくれた訳ですが、そのことを思った時、「イエス様が自分の身代わりになって自分を助けてくれた」ということの大きさが初めて心から分かったのです。

私達が、イエス様の血の恵み、水の恵み、神の霊に生かされて歩むために必要なのは、「自分の罪深さに対する嘆き、悔い改め」ではないでしょうか。自分のことを、そこそこ良い人だ、と思っている時、神の助けは、あれば嬉しいけど、無くても何とかなる程度のものではないかと思うのです。でも、私達が本当に自分の外的外れ、罪深さ、弱さを嘆く時、罪の赦し、神の憐れみ、イエスの十字架、そういったものがどうしても無くてはならないものになるのです。それなしには、自分の救いは考えられないものになるのです。その時、私達は砕かれて、神の導きを求めるようになるのです。その時、神の霊、神の恵みは、私達に流れて来るのではないのでしょうか。

最後に

ヨハネは、イエス様の「わき腹から…血と水が流れ出た」と書きました。「血と水が流れ出た」というのは、医学的には心臓が破裂したことを示すそうです。ローマ兵の槍はイエス様の心臓を貫いてイエス様の心臓は破裂したのです。イエス様は、十字架の上で、痛みと苦しみとの極みを味わって死なれ、そして最後は心臓まで破裂したのです。その全てが私達のため—(あなたのため、私のため)—であったことを、改めて感謝を持って受け止めたいと思うのです。私達の救いは全て、イエス様の十字架に拠るのです。